

## 故 多田幹郎先生追悼文

日本食品化学学会元理事長、多田幹郎先生が2018年4月18日に逝去されました。薬石効なく痛により、享年78才で旅立たれました。慎んで会員各位にお知らせ申し上げるとともに、追悼文を書かせていただきます。

多田先生は、1994年の当学会発足時から監事、理事、編集委員会委員、第7回(2001年)総会・学術大会学会会長、ならびに理事長を務められ、学会の基礎を作り、発展を支え続けてこられ、2012年、名誉会員となりました。多田先生の本学会へのご貢献に深く感謝いたします。

多田先生は、岡山大学農学部農芸化学科を1963年に卒業後、同学科の助手、1983年に助教授に昇任されました。この間に、京都大学から農学博士号を授与され、2001年に教授に就任されました。2006年に定年退職、同時に名誉教授になられています。

同年に、中国学園大学現代生活科学部教授に就任され、2009年からは学部長を務められています。また、内閣府原子力委員会食品照射部会部会長、日本食品照射研究会会長、放射線照射利用促進協議会協議員なども務められています。

多田先生は、植物化学や食品照射の研究分野でご活躍されておられました。小生が1990年に赴任しました農林水産省食品総合研究所(筑波)には、放射線利用研究室がありました。日本食品照射研究会の事務局も置かれていたことから多田先生は、たびたびお越しになられました。小生は別の研究室を担当しておりましたが、気さくにお話をしていただき、岡山大学や岡山県等での講演を頼まれて出かけていました。1996年に深刻な腸管出血性大腸菌O157:H7食中毒が発生し、かいわれ大根が原因食品とされました。多田先生は、O157対策にも放射線利用が有効であることを、いわゆるリスクコミュニケーションにより広く理解を得る努力を惜しみなく繰り広げられました。

多田先生は美味しい物には目のない方で、食品学者として肥えた舌と広範な知識をお持ちでした。清水白桃や黄ニラをごちそうになり、蘊蓄を聞かせていただいたときの得意満面のお顔が目には浮かびます。2012年に函館で当学会を開催した時にも、美味しい物が沢山あると言って、とても喜んでおられました。

多田先生が逝去されたことは、当学会のみならず放射線利用等、各分野にもとっても大きな支えを失ったこととなります。日本食品化学学会を代表して、ここに多田先生の本学会に対するご尽力に深く感謝の意を表するとともに、謹んでご冥福をお祈りさせていただきます。

2018年6月10日

日本食品化学学会顧問 一色賢司